

# 汲古一心

## 『仏蹟めぐり膝栗毛』(七)

中村素堂

玄関へ着くと、昨夜ダムダム空港に出迎えて下さったソフト博士、ヴァリシンハ事務局長その他の人々がすでに佇んで待っていて、握手するやら写真をとるやらして階下の講堂で一行の揃うのを待って、二階の図書室を今夜の客間とし、仏教文献のぎっしり詰まった書棚を背に主客二十余名が着席し、C君を通訳としてヴァリシンハ氏、ソフト氏の順で歓迎の辞、こちらはY団長らが昨夜から練って作ったメッセージを読み、次いで仏陀の白色陶製像一軀が記念としてわれわれ一行に寄贈され、なごやかな雰囲気の中にいろいろ珍しい菓子、果もの、パン、茶などが運ばれ、歓談の二時間をすぎす。話し好きらしいソフト博士は齒の抜けてる口から、なまりのある英語でしきりに話す。その中で「多感の人はみな仏教徒である」といわれた一語は深く心に残った。

われわれの方からも一封の布施を献じて会を終え、隣りの来賓室の方へ移って休んだが、この室にわが皇太子殿下が先年この会へよせられたメッセージが額にして壁にあつた。明仁とローマ字のごサインをされておれる。期せずして求める気持ちと同じで、この写真を欲しいという声はついに大菩提会でも快諾するところとなつたが、漫々デー以上の漫々デーであるインドのこと、爾来二ヶ月本稿でお目にかけるれないのが残念である。

次いでさらに隣りの仏堂に入る。これは大きな室で、おそらくは五体投地の礼拝をするのであろう。椅子のようなものは一脚もない。われわれも座つて三帰依文その他を唱えて礼拝し、光線の無理も承知で記念撮影などもして、並んでおられる仏像を拝観する。

正面はインドのもの、左は日本の鎌倉以後の作とみられる金色燦然たる阿弥陀像、右はセイロンの釈迦像どちらもガラス張りのケースに

入つて置かれていた。簡素であるがいかにも仏教者の会堂という気分が溢れていた。

いまふと思ひ出したが、このお茶の会で馳走にあずかつたものはみなうまかつたが、中でパンと紅茶が最もうまう、つぎが菓子、つぎが果物であつた。この果物の中に名を訊ねたらイチジクといわれた果実は、日本の柿のようで味もそうであり、ヘタも小さいが四角いものであつた。種子も黒いが扁平な柿に似たもの、こっそりちり紙に包んで持ち帰つてきた。

春のお彼岸時分に蒔いたらどんな芽が出るか。もし生きているうちに実がつかましたら本誌読者には特にご馳走いたします。なにしろ天竺伝来のイチジクは、柿を本地としてゐるらしいですから。

食物について関心の深い私の口に、ここでのご馳走は空気のせいかなソフト博士との話の楽しさからか、記憶に残るうまさだつた。

### 四

カルカッタに二泊、前夜からの号令によつて三日めの朝は四時に起床。あらかじめ忘れものもないように仕度などはしてあつても、こう早く発つとなると多忙。浴面お手洗ひも時計を見ながらというくらいにして、全員ホテルの玄関に靴を並べたのは五時を少し過ぎていた。

廊下のじゅうたんの上で犬がおシッコをしているかわいらしさ？

あとさきに室を出てくる同行の大きなあくび、エレベーターボーイの黒い顔も、ちと眠そう。なにもかも早朝のホテルの少し辛いムード。一番遅くかけつけたのが全仏蹟を案内することになつてゐるガイドのリッシ君とあつて、旅行会の方はカンカンになつてゐるが、ご本人はニコニコ顔で宿屋のパンフレットなんか配つて平氣の平左衛門。大陸的というのか狡いのかこの漫々デーにずっと馴らされつ十数日を過ごし、インド的のどかさ満喫させられるのである。(つづく)

〈仏教書道〉、昭和四十一年